

杉柱のいえ



南西側から見る。可動式水平ルーバーにより日射を調整する。



居間内観。天井高は2300mmと低めだが、南側の大開口と吹き抜けの効果により開放的な空間を演出する。



北側道路から見る。列柱が都市のランドスケープとなる。



北西角方向から見る。建物高さを低く抑え、圧迫感を軽減させる。

本計画は京都郊外に建つ30代の夫婦と子二人の為の住宅である。敷地は北西角地であるが、北側道路は建物地盤面から最大で1mほどの高低差がある為、アプローチを西側とし、敷地南側に広い庭を確保して、大開口と吹き抜け持つリビングから家全体に光と風を取り込む計画とした。

周囲を取り巻く列柱には、丸太でありながら真っ直ぐに成長する北山杉を採用した。この列柱には、大きく張り出した軒・けらばを支える役割を果たすと共に、大開口を設けた南面にあっては夏季の日射を遮るための可動式水平ルーバーの取り付け下地として、湿気等で汚れ易い北側にあっては清掃足場と町のランドマークとしての機能を持たせた。

建物外周が杉の柱に取り囲まれ、入れ子のように包み込まれるフォルムは、建物外部と内部の間に緩衝帯を生み出し、縁側空間を作り出すと共に、建物内部からはあたかも森林の中に建つ小屋にいるような感覚を想起させ、住まう人にくつろぎと安心感を与えることを期待している。



南側外観。列柱に支えられた大屋根とルーバーが外観を特徴付ける。

